

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	宮野 祥子
論文題目	コミュニケーションの共創モデルと国際理解教育の可能性
審査要旨	
<p>本論文は、生命現象そして生命科学の観点からみるコミュニケーションのあり方として「コミュニケーションの共創モデル」を提示し、そのメカニズムと性質を明らかにすることを通して、そのモデルが示す教育的意味そして教育目標・教育方法について考察し、さらにはそれらを通してそのモデルがもつ国際理解教育にとっての意味とその実践に向けての可能性を描き出すことを目的とした論文である。</p> <p>コミュニケーションの共創モデルでは、コミュニケーションを「多態的、非線形的、動的な性質をもち、ゆらぎを増幅・活用するシステムである生命体が他者と共鳴・乖離して、状態変化を生み、生命体自体を共創するプロセス」として捉えており、生命現象をコミュニケーションの視点から捉える生命科学を踏まえたものである。そのモデルは、これまでの教育学にみる意思伝達を目的としたコミュニケーションのコードモデルを批判的に捉え直し、また推論モデル、身体からコミュニケーションを捉える立場など他のいくつかのコミュニケーション論を補完・深化させるモデルとして位置づけられている。また多態的、非線形的、動的という生命体の性質を高めることを教育目標として、ゆらぎを増幅・活用するリフレクション、リリース、リフレインという方法を教育方法として考察している。さらにはそれらを通して、平和の文化の実現をめざす国際理解教育の目標構造と実践へのアプローチに生命自体へのアプローチであるそのモデルを組み入れることの意味と可能性を示している。</p> <p>具体的な論の展開は以下の通りである。序章では、教育を通じた平和実現への問題意識を提示し、またコミュニケーションに関する先行研究を整理したうえで、本論文の目的として以下の3点を示している。第1に生命現象の観点からみるコミュニケーションのあり方を示すものとしてコミュニケーションの共創モデルを提示し、それに基づいてコミュニケーションのメカニズムと性質を明らかにすることであり、第2にコミュニケーションの共創モデルに基づいて教育を問い直し、教育目標と教育方法について考察することであり、第3にコミュニケーションの共創モデルが国際理解教育においてもつ意味とその実践に向けての可能性を、「平和の文化」の実現に向けての目標構造と実践へアプローチの視点から探究することである。</p> <p>第1章では、これまでの国際理解教育におけるコミュニケーションの捉え方を、研究論文や実践報告等を対象に、①「コミュニケーションという語が登場する文脈」、②「実践が行われている分野・科目」、③「コミュニケーション力の育成方法」、④「コミュニケーションの対象」、⑤「コミュニケーションないしコミュニケーション力の捉え方」という観点から分析し、コードモデルにもとづいたコミュニケーション論が主流であるものの、「場」や「身体の互換性」といったコミュニケーション論が示されつつあることを指摘している。</p> <p>第2章では、生命科学の観点から生命現象にみるコミュニケーションを捉え直し、コミュニケーションのメカニズムとその性質を明らかにしている。そしてそれらを踏まえてコミュニケーションの共創モデルによるコミュニケーションの定義を、上述したように示している。</p> <p>第3章では、コミュニケーションの共創モデルから、コミュニケーションと学びの関係を軸に、これまでの教育学にみる意思伝達を目的としたコミュニケーションのコードモデルを批判的に捉え直し、またこのモデルが、推論モデル、身体からコミュニケーションを捉える視点、受信者や</p>	

氏名 宮野 祥子

聞き手を重視する視点、対話を重視する視点、コミュニケーションの多層性を重視する視点、共鳴モデル、生命体としての人間のコミュニケーションを重視する視点など多様な視点からの教育学にみる他のコミュニケーション論を補完・深化させるモデルであることを論じている。つまりコミュニケーションの共創モデルは、生命のあり方そのものからコミュニケーションとそのコミュニケーションにより生じる学びのあり方を問い、さらにそのメカニズムと性質を提示することを通して、学びの活性化という教育の原点とその意味を浮びあがらせている。

第4章では、ゆらぎの増幅・活用を活発にすること、多態的、非線形的、動的というコミュニケーションの性質を高めることを教育目標として示し、ゆらぎを増幅・活用し3つの性質を高めるリフレクション、リリース、リフレインという方法を教育方法として示し、目標と方法を一体化させた教育実践へのアプローチの方向性を提示している。

第5章では、それまでの議論を踏まえて、平和の文化の実現をめざす国際理解教育の目標構造と実践へのアプローチに生命自体へのアプローチであるコミュニケーションの共創モデルを組み入れることの意味と可能性を示している。つまりコミュニケーションの共創モデルにみる「からだ」の変化が文化の変容、文化の共創につながっていくこと、また国際理解教育の目標構造として示されている「人間関係づくり」「問題理解・問題解決」、「文化理解」、「未来想像」という4つの目標と「人間関係アプローチ」、「問題解決アプローチ」、「文化理解アプローチ」、「未来想像アプローチ」という4つのアプローチの根底に共創モデルによる「生命力の向上」とリフレクション、リリース、リフレインという3つの方法による「生命力アプローチ」をすすめることで、4つの目標とアプローチはゆらぎの増幅・活用という観点からそれぞれ深化し、国際理解教育実践の可能性を拡げていくことを示している。

公開審査会では、教育そして国際理解教育におけるコミュニケーションに焦点を当て、生命科学におけるコミュニケーション論を援用し、コミュニケーションの共創モデルを提示したこと、そしてこれまでの教育学にみるコミュニケーション論を深化・補完しようとしていることに対して、意欲的であり、斬新であり、高く評価したいとの意見が示された。また個別の記述内容に対しては、コミュニケーションにみられる同質的抑圧的相互作用と共創モデルとの関連、相互引込の事例と共創モデルとの関連、また共創モデルにみる「からだ」と平和の文化づくりの主体論や歴史性の関連などについての質問が出された。そして最後に、本論文ではコミュニケーションの共創モデルの教育実践への意味と可能性を理念的に示すことにとどめているが、今後は、理論的精緻さをさらに深めつつ、既存の実践もしくは新たな実践づくりの中にこのモデルを組み入れることで、実践にどのような変容が生まれるのかといった点を含む実践研究を進めていくことが課題であることが確認された。

教育そして国際理解教育にとってのコミュニケーションのあり方とその意味を生命現象・生命科学の観点から理論的に示した論文であり、教育学におけるコミュニケーション論研究の枠を拡げたという意味からも、審査委員会は全員一致で博士学位の授与にふさわしい論文であると判定した。

公開審査会開催日	2018年 4月 25日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	山西 優二	国際教育学、共生社会論	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	梅本 洋	教育哲学	
審査委員	日本大学文理学部・教授	渡部 淳	教育内容・方法論、国際理解教育論	博士(日本大学)